



**日本動機づけ面接協会  
(JAMI)  
第11回大会  
プログラム・抄録集**

日時◆2023年3月11日(土) 14:00~17:00

3月12日(日) 14:00~17:00

会場◆オンライン

主催◆一般社団法人日本動機づけ面接協会 (JAMI)

## ご挨拶

### 第11回日本動機づけ面接協会年次大会にあたり

第11回日本動機づけ面接協会年次大会長  
防衛医科大学校医学教育部看護学科 瀬在泉

2023年3月11日(土)・12日(日)の両日、第11回日本動機づけ面接協会年次大会を開催いたします。幸いCOVID-19の流行状況は落ち着いてきておりますが、本大会も昨年に引き続きオンライン開催とさせていただきます。何卒ご理解を頂けますようお願い申し上げます。

今回の年次大会は、「多職種連携や協働作業を繋ぐMI」というテーマを掲げました。私は現在看護基礎教育に携わっておりますが、保健・医療分野の活動をも、もはや「連携」という言葉を耳にしない日はないほどに、今後の対人援助活動を考える中で欠かせない概念であることは間違いありません。ところで、この「連携」というのは具体的には何を指すのでしょうか。例えば職種間の連携ひとつを考えてみても、ある職種とある職種の集団的な連携を指す場合もあるでしょうが、基本的には「人」対「人」の関わりが基本であり、その根底には「職種」ではなく「(その役割を担っている)人」同士の良好な繋がり抜きにその実現は困難であることは想像に難くありません。また、もちろん「連携」の中心には私たちが支援したい、力になりたいと心を寄せる対象者が存在し、対象者の力を共に信じ引き出すことを目指していることも、この総会にご参集の皆さまは十分にご存じのことと思います。

このようなことを踏まえ、今回のプログラムも動機づけ面接を学ばれる皆さまに貢献できるような内容を、理事の先生方と共に準備いたしました。総会の初日はちょうど東日本大震災から12年目を迎えますが、2日目の教育講演では、災害時の心理支援、支援者支援の第一人者である岡山大学の原田奈穂子先生をお迎えし「危機的な状況下における支援者支援：VUCAを見据えて」についてお話を頂きます。また、シンポジウム2「多職種連携とMI」では、福祉や教育領域でのご経験が豊富でありMINTメンバーでもいらっしゃいます国際医療福祉大学の須藤昌寛先生より「地域共生社会におけるMIと多職種連携」というテーマで基調講演を頂いたのち、保健・福祉の現場での活動について4名の先生方からご報告頂く予定です。さらに、昨年の秋よりJAMIの役員が新体制となりました。そこで、理事の先生方によるシンポジウム1「JAMIの10年 -これまでとこれから-」を企画いたしました。JAMIの活動を中心に動機づけ面接を学ぶ私たちの連携や発展についてお話を伺える時間となることと思います。

また、一般演題として3題のご発表も予定されています。いずれの演題も動機づけ面接の意義と良さを皆さまで共有できる素晴らしい内容となっております。

ぜひ多くの皆さまにこの大会にご参加頂き、私たち一人ひとりがMIの精神「Partnership・Acceptance・Compassion・Evocation」で繋がり、更にはお互いがempowermentされる時間となることを心より願っております。

最後になりましたが、大会の準備、開催にあたりご協力頂きました多くの皆さまに厚く御礼申し上げます。

## プログラム

2023年3月11日（土）

1日目

14:00 代表理事挨拶 川村智行  
大会長挨拶 瀬在泉

14:10 シンポジウム I 「JAMI の 10 年 -これまでとこれから-」

座長：代表理事 川村智行

シンポジスト

・ JAMI のこれまでの歩みと今後の課題

あべのメディカルクリニック 川村智行

・ JAMI の航路-技能検定と JAMI 主催 WS を中心に

東京都立松沢病院 精神科部長 今井淳司

・ JAMI 理事としてのこれから

神戸学院大学 心理学部 心理学科教授 村井佳比子

総合討論：今後の JAMI のあり方についての皆様のご意見をお聞かせください

15:30 休憩

15:45 一般演題（3題）

座長：大阪糖尿病クリニックサポートオフィス理事 川村恵子

1. トラウマのある方への援助における方向性

～MI はいかに TIC（トラウマインフォームド・ケア）と PTG（心的外傷後成長）の  
促進に寄与するのか～

野村総合研究所・産業医、精神科医 桜井昭彦

カトリック麴町 聖イグナチオ教会 精神保健福祉士 MINT 理事 青木世識

2. COVID-19 流行下の中期的な小児肥満治療成績の振り返り

この予期せぬ事態に MI を学ぶ者ができる支援とは？

和泉市立総合医療センター 小児科 坂東賢二

3. 福祉領域の MI 学習会の実践報告

東北会病院 齊藤健輔

NPO 法人ささしまサポートセンター 小木曾学

16:55 諸連絡

17:00 終了

## プログラム

2023年3月12日（日）

2日目

14：00 諸連絡

14：05 教育講演

座長：大会長 瀬在泉

危機的な状況下における支援者支援：VUCAを見据えて

岡山大学 原田奈穂子

15：05 休憩

15：15 シンポジウムⅡ「多職種連携とMI」

座長・国際医療福祉大学 須藤昌寛

・基調講演：地域共生社会におけるMIと多職種連携

国際医医療福祉大学 須藤昌寛

シンポジスト

・地域包括支援センターが動機付け面接を使ったら

地域包括支援センターとちのみ 山越正人

・地域づくりと連携

芳賀町住民生活部子育て支援課児童福祉係 山中夏子

・MIを学んで感じた変化と課題

岡本台病院 横地信矢

・社会福祉法人における多職種連携の課題

社会福祉法人恵友会 若倉健

16：55 閉幕挨拶

17：00 終了

## 抄 録

3月11日(土)

### <シンポジウム1>

「JAMI のこれまでの歩みと今後の課題」

あべのメディカルクリニック 川村智行

私が MI を学びたいと名古屋メンタルクリニックの原井先生のもとに押しかけていったのは、名古屋駅前での日差しが厳しかった2008年の夏だったと思います。その後家内と二人でクリニックまで個人研修を受けに行ったこともつい昨日のように記憶しております。2012年9月原井先生と岡嶋先生、山本様の3名で設立された「日本動機づけ面接協会 JAMI」は、日本で唯一の法人として MI の普及にとっても重要な役割を担ってきました。特に毎年 MINT からの著名な講師を迎えてのワークショップは、世界の最先端 MI を知ることが出来る窓口でもあります。この度 JAMI の理事を拝命しその重積を実感しております。この講演では、JAMI のこれまでの歩みを振り返ることと、今後の JAMI の方向性を考え、シンポジウムの中で皆さんと議論できればと思います。

「JAMI の航路-技能検定と JAMI 主催 WS を中心に-」

東京都立松沢病院 精神科部長 今井淳司

動機づけ面接に出会い、かれこれ15年ほどの時が過ぎた。動機づけ面接は演者の人生を変えたといっても過言ではないし、演者の動機づけ面接の研鑽の歩みは JAMI とともにあったと言っても過言ではない。新理事としての、私の役割は、この10年間継続されてきた技能検定の継続と発展および新規の試みである JAMI 主催 WS の開催である。現在まで JAMI2 級は多く輩出されたが、1 級の取得者は少なく、トレーナー検定は開催されていない。JAMI には定期的に全国各地の WS 講師案件の依頼がくる。技能検定でスキルアップした会員に、それらの WS を割り振り、全国各地に MI の普及を図りたい。同時に、JAMI には各分野で活躍する会員が所属している。標準的 MI の枠を越えた各領域のスペシャリストならではの、書籍や日頃の WS では体験できないような WS を企画することにより、MI 学習者のスキルアップの場を提供したい。これら MI の普及、MI 学習者のスキルアップ、は有機的に作用し JAMI の最大の目標である、「その先にいるクライアントの幸福」につながっていく。

「JAMI 理事としてのこれから」

※本講演は事前収録の配信になります。

神戸学院大学 心理学部 心理学科教授 村井佳比子

臨床に行き詰り、突破口を求めて原井宏明先生のクリニックに伺ったのが2011年、私の動機づけ面接との出会いは、その翌年の2012年となります。この年に設立された「日本動機づけ面接協会 JAMI」の大会とワークショップに毎年参加させていただくことで、初心にかえるとともに、さまざまな分野の方々とのつながることができ、自己研鑽への動機づけを高めることができていました。理事を拝命し、このご恩返しのために何ができるかを考える毎日です。本講演では、JAMI のニューズレター1号と2022年春号をご覧くださいつつ、会員のみならず、みなさまとの交流の在り方について、新理事としての思いをお話ししたいと思います。

## <一般演題>

### 1. トラウマのある方への援助における方向性

～MIはいかにTIC（トラウマインフォームド・ケア）とPTG（心的外傷後成長）の促進に寄与するのか～

筆頭発表者

野村総合研究所・産業医、精神科医 桜井昭彦

共同発表者

カトリック麹町 聖イグナチオ教会、精神保健福祉士、MINT 理事 青木世識

#### 概要

人間の一生において、自死をはじめ、突然の死別体験は、トラウマ体験になりうる。トラウマ体験は、既に知られているように、PTSDをはじめとした様々な心身症状を引き起こす。トラウマ体験を聴く対人援助に関わる者にとっては、実践の場は、バーニングアウトや介入の難しさに直面する場面となりうる。

一方で、トラウマ体験を抱えた者の日常生活では、自らの人生で、PTG（心的外傷後成長）を体験し、社会に再適応していく継続的過程（プロセス）は必要不可欠である。そこで本発表では、トラウマインフォームドケア（TIC）の基本理念をもとに、MIがPTGをいかに促進するかという論点にたち、トラウマ体験のある方への援助における方向性の喚起の重要性について触れたい。

## 2. COVID-19 流行下の中期的な小児肥満治療成績の振り返り

この予期せぬ事態に MI を学ぶ者ができる支援とは？

和泉市立総合医療センター 小児科 坂東賢二

### 【背景】

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）が2020年初冬からパンデミックを引き起こしてから3年が経過した。COVID-19は全国一斉休校措置、部活動の休止措置など、学童期の子ども達に多大な影響をもたらした。パンデミック初期の影響として、子どもの生活習慣、肥満が増悪することが報告されている。現時点でCOVID-19流行の中期的な影響を検討した報告が少ないが、①パンデミック前から肥満があった児は肥満を増悪しやすいこと②肥満介入プログラムの効果が減弱することが示されており、その対策は重要な課題である。著者は先行研究において小児肥満にMIを用いて介入し、MIの習熟度が上がると通院継続率が上昇することを報告した。今回、COVID-19流行3年の間、小児肥満症にMIを用いてどのように対応していたかを治療成績と共に振り返った。

### 【対象と方法】

対象は2019年と2020年の学校検診で肥満度が40%以上（20%以上30%未満を軽度肥満、30%以上50%未満を中等度肥満、50%以上を高度肥満）であることを理由に当院へ受診勧奨された単純性肥満の小中学生45名。介入開始時期により、A群（COVID-19流行前年の2019年に介入を開始した27名）、B群（流行初年の2020年に介入を開始した18名）の2群に分類した。その上で、通院状況、肥満度の推移、診療録の記載内容を検討した。

### 【結果】

2群全体の年齢は中央値で10歳。初診時肥満度はA群/B群； $44.2 \pm 8.1 / 44.8 \pm 7.4$ で両群に差は無かった。通院日数の中央値はA群/B群；964/730日。介入開始2年時点の通院継続率（A群/B群）は78%/81%で、高い通院継続率を維持していた。肥満度の変化（初診時→最終受診時）はA群では $44.2 \pm 8.2 \rightarrow 44.8 \pm 18.7$ と有意差なく（ $P=0.83$ ）、B群は $44.8 \pm 7.4 \rightarrow 38.6 \pm 11.47$ と改善していた（ $P=0.03$ ）。A群で7/27名（26%）、B群で7/18名（39%）が合意の上で通院を卒業できていた。診療記録を振り返ると、2020年の緊急事態宣言の時期は、受診不安に対して電話での診療を試みたり、2021年夏頃にはCOVID-19のワクチンに関する質問に対しEPEを用いた情報提供を行っていた。対象期間中に4名が不登校状態になるなど、肥満症以外のメンタルヘルスに関する相談を受けることもあった。また、2021年頃から診療録に“日誌”という記載が増え、行動療法としてのセルフモニタリングを試みて治療効果をあげようとする様子が見え始めた。

【考察と結語】COVID-19の流行という予期せぬ状況になっても、MIを用いた介入は高い治療継続率と肥満の増悪の抑制効果を示した。治療効果はCOVID-19流行中にむしろ向上していた。MI学習者として、この3年間の予期せぬ事態に対して、一緒に対応を考えながら（Partnership）、関りを保ち続け（Engagement）クライアントと並走させてもらえた（guiding）というのが主観的な感想である。治療継続率は観察しやすく、クライアントとの関係性が保てていることを示す重要な指標であると考えられた。



### 3. 福祉領域の MI 学習会の実践報告

東北会病院 齊藤 健輔

NPO 法人ささしまサポートセンター 小木曾 学

動機づけ面接はアルコール問題から始まり、現在はプライマリケア・公衆衛生・産業保健・司法・教育など様々な領域へ広がりを見せている。福祉領域でも少しずつ動機づけ面接の重要性が認知されてきているが、日本ではまだこの領域に特化した動機づけ面接のコミュニティなどが見当たらなかったため、発表者2名の発案から始まった。

ちょうど新型コロナウイルスが広まってきた、2020年3月にオンラインで事前にどのようなニーズがあるか、進行や内容をどのように方向づけるか、話し合いのミーティングを行った。この話し合いをたたき台として、「福祉領域の MI 学習会」として開始することとなった。

目的としては、「①動機づけ面接の技能を高める」「②つながりを作り、広げていく」この2点とした。また、参加者の範囲として福祉領域をどのように定義するかが非常に難しいところであった。福祉 (Welfare) を「幸福」や「よりよく生きること」とするならば、おそらくほとんどの対人援助職は該当するであろうという考えを取り入れて、特に福祉職と定義せずにゆるい範囲となっている。主な内容としては、デイビッド・B. ローゼングレンの「動機づけ面接を身につける～一人でもできるエクササイズ集」を中心に用いている。発表者2名が管理と運営を担うが、毎回エクササイズのファシリテーターを1名募集し、内容や進行を任せている。トレーナーまでの役割はないが、エクササイズを要約し理解し伝えるという一連の作業自体が学びになっていると感じている。

今回は、2020年4月から約2年毎月開催されてきた福祉領域の MI 学習会の実践を報告させていただき、課題やこれからの展望を考察したい。

3月12日（日）

<教育講演> 座長：瀬在泉

危機的な状況下における支援者支援：VUCA を見据えて

※本講演は事前収録の配信になります。

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科看護科学分野  
医学部保健学科 看護学専攻 基礎看護学領域  
教授 原田奈穂子

危機的な状況下は、日常生活から人道的危機まで多様な状況で発生します。私は災害時の支援を通じて、支援者への支援の重要性を痛感し、支援者支援の実践と研究に携わってきました。派遣チームのような支援者への支援も必要ですが、自らも被災をした立場であるにも関わらず支援者の立場を有する地域の行政職や医療者への支援者支援は、長期的な地域復興のかなめと言えます。

人道支援における国際基準であるスフィア基準は、「支援者は効率的に職務を行えるよう、自らもサポートを受けられ、適正かつ公平な扱いを受けている」ことを1つの基準として定め、支援者支援の必要性を明記しています。支援者への支援では、動機付け面接の基本的なスキルである OARS は非常に有用ですが、プロセスは通常と少し異なると感じています。演者の支援者支援の経験を通じて動機付け面接の有用性に触れながら、VUCA における人のレジリエンスについて考察します。

<プロフィール>

1998 聖路加看護大学看護学部卒業

2009 ペンシルバニア大学看護大学院成人急性期ナースプラクティショナー修士課程修了

2015 ボストンカレッジ看護大学院博士課程修了

防衛医科大学校、東北大学、宮崎大学などを経て、2022年4月より現職  
看護師（日本・米国）、保健師、Ph.D

## <シンポジウムⅡ>

### 地域共生社会における MI と多職種連携

座長：国際医療福祉大学 須藤昌寛

地域共生社会では、すべての人が支え合いながら自分らしく活躍できる社会の実現を目指している。この背景には社会の多様化が進み、支援を必要とするクライアントへの対応が従来の縦割り制度の中では難しくなってきたこともある。

複雑化するクライアントの対応では、両価性を解消し行動変容に結びつけた後もライフステージに応じた支援を継続していくことが求められているが、一方で支援に必要な連携の難しさも指摘されている。今回のシンポジウムでは、地域共生社会の中でどのような多職種連携が求められているのか、そして連携を行う上での課題は何かということを考えていきたい。

#### 「地域包括支援センターが動機付け面接を使ったら」

地域包括支援センターとちのみ 山越正人

地域包括支援センターには①ケアマネジメント②総合相談③権利擁護④地域づくり等の様々な業務があり、MI を活用している場面がある。ケアマネジメント、地域づくりの業務の中でどのように MI を活用しているか、事例を通して紹介していく。

#### 「地域づくりと連携」

芳賀町住民生活部子育て支援課児童福祉係 山中夏子

個別事例で一对一の面接で MI を使うこともあります。町に住んでいる人が自然に動機づくような環境づくりの担い手の一人として感じていることは、地域のたくさんのステークホルダと付き合っていくとき、MI を意識することもよくあります。

連携するには、相手のおかれている状況や背景、その分野の文化を知ることが大切だと感じています。連携が難しいと感じることの多くは担当者とのやり取りの中であり、担当者の背景をある程度理解していくときに MI が有効だと感じる場合があります。

## 「MI を学んで感じた変化と課題」

岡本台病院 横地信矢

最初に、所属精神科病院や病院内での心理職業務の概要を説明する。

次に、MI がどのように精神科の臨床場面で役立っているかについて、依存症の方への支援を例に挙げ、MI の技法の活用よりも MI を学ぶことでの人間観の変容が患者への態度に影響していることを述べる。

最後に、多職種連携の課題について、筆者個人の課題や考えの異なる他職種に MI の考えをどのように理解してもらえばいいのか等を中心に述べる。

## 「社会福祉法人における多職種連携の課題」

社会福祉法人恵友会 若倉健

地域共生社会の実現に向けて、社会福祉法人としてどのように事業を展開してきたのかについて概観した上で、地域で暮らす中で多くの問題があり、効果的な医療や福祉の支援を受けることが困難であった精神障害および発達障害のある対象者 2 名への支援過程を通して、自分では左右できない条件を背負った対象者および支援者がどのように生きてきたのかを支援記録と資料から描き出すことを試みる。

多くの問題を抱えている人々へのアプローチとして、地域の中で多職種が連携し、支援を展開することが重要であると考えられている。しかし、事例検討の結果、「専門職」や「専門機関」において、それぞれの「専門的」な視点が共有され、要支援者への「有効」な支援に結びついていない。このような問題提起を医療・福祉の専門職教育の中核に位置付け、教育を再編する中で、地域共生社会における専門職の役割もまた明確となるのではないかと考える。

---

第 11 回年次大会

主催：一般社団法人 日本動機づけ面接協会